

聖書 新約聖書 マタイの福音書5章9節

説教 「平和をつくる」小野信一牧師

8月15日です。昭和20年、1945年のこの日、8月15日に戦争が終わり、日本は戦争に負けました。正午に玉音放送があったということを知っています。その日、それを聞いた方もいるでしょうし、私たちのように戦後に生まれた世代も、段々と増えてきているところではあります。その日まで生きていた人たちにとっては、それは大変な日々であったでしょう。またその日からの戦後の生活の中を通過してきた方たちにとっても、そうであったろうと思います。私たちは今日、戦争のことを思い起こし、敗戦を記念して心に刻み、また平和を共に考えます。今年は8月15日が日曜日です。感染症のために様々なプログラムはできません。大人・中学生以上と、小学生以下は分けて、敗戦記念礼拝を行っています。大切な日曜日としてこの日を過ごしたいと思います。

お祈りをささげましょう。

「天の父なる神さま。御名をあげます。今あなたの御前に出て、私たちは敗戦記念礼拝をささげます。この世界と、私たちの国にあった、大切な過去の出来事を記念して、あなたの前で、心に刻むために、御前に敗戦記念礼拝をささげます。争い奪い合う人間の過ち、そして私たち日本の国の過ちをあなたはご覧になりました。そしてそれから76年の今日までの、世界と日本の歩みを、あなたはご覧になっておられます。どうか一人一人が、今胸の内にある思いを、あなたにお話しすることができますように。また心を開き、耳を開いて、あなたが語ろうとされることを聞くことができますように、この礼拝のひとときをお導きください。みことばが開かれました。みことばをもって私たちにお語りください。主イエス・キリストの御名によってお祈りします。アーメン。」

I 平和を望む私たち

皆さんお手元に敗戦記念礼拝のガイドブックありますでしょうか。今読まなくて結構なんですけれども、後でぜひお読みください。私も読ませていただきました。

今日は、三会堂の合同礼拝ですけれども、一緒に集まれないので、中央で、丘の上で、庄和で集まり、そして各家庭で礼拝をささげています。このマイク、カメラなどを通して届いていることを願いながら、共に礼拝をささげています。そしてガイドブックの最後に記されている『平和の祈り』と一緒に祈りたいと思っています。

今日は8月15日です。そしてオリンピックが終わりました。パラリンピックがこれからまた始まろうとしています。ある国の選手は「イスラエルの選手と試合をすることになるならば棄権します」と言ったそうです。イスラエルの国の人とは試合をすることもしたくない、身体に触れることもしたくない、同じ立場に、同じ土俵に立ちたくない、というような思いがあったということなのでしょう。今年がオリンピックになりまして、来年がサッカーのワールドカップの年なんですけれども、イスラエルという国は、位置はアジアに位置していますよね。しかし、アラブの国々との試合ができな

いので、つまりもし試合をすると、そこに暴動が起こるとか、あるいは対戦を拒否するとか、そういうことが起こるので、ワールドカップ予選は、イスラエルは、ヨーロッパ地区の予選に入っています。世界の国々には、さまざまな、そういう軋轢が今もあります。私は家に子どもが生まれたら、バイリンガルに育てたいと思っていたことがありました。それは現代ヘブル語とアラビア語のバイリンガルって意味なんですけれどね。神学校で内田先生が「イスラエルとアラブの関係は非常に難しい。ヨーロッパの国々、アメリカなどの国は、これまでの様々な経緯があって、調停は難しい。だから日本のような国が、イスラエルとアラブ諸国との間を取り持つことが期待されるのではないか」と話しておられたことがありました。それで、両方の国のことばを話し、食べ物を食べ、一緒に生きられる人間が必要だなと思い、そうなれないだろうかと思ったということです。もし子どもが生まれてきたら、そういう期待をしていたかもしれない。子どもからしたら、いい迷惑だろうと思います。子どもに期待しないで、自分で頑張れ、という話だと思います。

私たちはいろんな形で平和を望みます。平和であってほしい、平和になってほしい、そして誰かが平和をつくってほしい、平和にしてほしいと思います。平和を望む私たちに、イエス様は言われます。「あなたがたは祝福された、平和をつくりだす人々だ。平和と平安を望み、求める人よ。あなたがたが平和をつくりだす人になりなさい。」イエス様はそう言われているのではないのでしょうか。自分に戦争を止めるなんていうことはできるのだろうか。それは80年前の戦争のことを思った時にも、これから起こるかもしれない戦争のことを思った時にも、「自分に止めるなんてことは無理だ」と思うかもしれません。「国と国の間を調停するなどということは自分にはできない」と普通の私たちは思うでしょう。

今日はこのガイドブックのですね、巻頭言の中に、戦争とコロナとオリンピックについて思うことを書かせていただきました。その中にもちょっと触れたんですけども、今このコロナの中でオリンピック、パラリンピックが行われる、そういうことの微妙な思いが様々にあるだろう、ということについて少し触れました。感染症対策としては、ちょっと今ここで触れたいんですけど、今までは「マスク無し、手が届く1m以内の距離、そして15分以上の接触」っていうのが、いわゆる濃厚接触だと言われていたんですけども、今は「15分以内なら大丈夫」ではなくて、「数分でもうつるかもしれない」と言われるようになっていきます。デルタ株のウィルスの量とか、感染力とか、そういうことが違う、毒性も強いということなんですね。ですので、今いろいろ世の中にありますけれども、「マスクなし1m以内5分以上の接触は、感染を起こしやすい濃厚接触ですよ」というふうに、例えば変えてですね、それをみんなにアナウンスするとかしたら良いんじゃないかというふうに思ったりします。もしかしたら3分かもしれません。「1、2分しか話してないのにうつるっていうことが起こっているかもしれない」と言われています。

さてみことばに戻りましょう。これはマタイの福音書5章、いわゆる『山上の説教』の中の、幸いな人の教えです。祝福された人はこういう人です。9節に「平和をつくる者は幸いです。その人たち

は神の子どもと呼ばれるからです。」とあります。ある英語の聖書では“You're blessed when you can show people how to cooperate instead of compete or fight.”「競争するとか戦う代わりに、どうやってコオペレートするか、協力するか、一緒にやっていくかを示すことができるなら、そのときあなたがたは祝福されています」というみことばがあります。これは英語の『ザ・メッセージ』という聖書です。

成蹊学園という学校の出身の俳優で中井貴一さんという人がいます。ある時、その学校の関係者の方たちに話をすることを聞きました。「成蹊の卒業生は競争するよりも協力が得意なんだと思います。」と言ってたんですね。「競い合うとか、誰かと戦うよりも、協力する、一緒にやっていくのが得意なんだ」という話をしていました。この『ザ・メッセージ』のマタイ5章9節は、正にそのようなことばが使われている訳になっています。「競い、争い、戦う」よりも、「協力すること」「一緒にやっていくこと」、それが普通の聖書では「平和をつくる者」とか「PEACEMAKER」というふうに使われているんですね。

II 平和をつくる人に

今日は「平和をつくる」ということについて考えてみましょう。平和を望み、「平和になってほしい、誰かが平和をつくってほしい」と思うかもしれません。誰かが自分たちに平和をもたらしてほしいと思うかもしれません。でもイエス様は「平和をつくる人は幸いです。あなたたちはそうなれるのです」とおっしゃっているんですね。

三つの面で「平和をつくる」ということを考えてみたいと思います。

一つは「優しくしなさい」ってことです。そうすれば相手の心に平和をつくることができるでしょう。エペソの4章の32節を読みたいと思います。新約聖書エペソ人への手紙の4章、一番最後の32節。「互いに親切にし、優しい心で赦し合いなさい。神も、キリストにおいてあなたがたを赦してくださったのです」。前の聖書では、「心の優しい人となり」というふうに書いてありました。「優しい心」で「互いに親切にして」ということですね。御霊の実、愛・喜び・平安からはじまる御霊の実の4番目から6番目を思い出してみましょう。寛容・親切・善意という言葉がありました。「寛容・親切・善意」。「互いに親切にし、優しい心で」と言われています。もし私たちがそれを行うことができるなら、身近な家族やクラスメイト、友だち、会社の同僚、接する人に優しく親切に、寛容・親切・善意を持って接することができるならば、相手の心に平安を、平和をつくりだすことができるでしょう。それは小さな小さな平和かもしれません。でもそれは大切なことです。

最近いろんな宣教団体から来たニュースレターを整理していて、宮本先生っていうアメリカで日本人宣教をしている先生が、日本の宣教について書いておられるのを読みました。「アメリカに来ると、あるいは外国に来ると、日本人は割と抵抗なく教会に行きます。そしてイエス様を信じる人が決して少なくない、たくさんいるんです」という話を伝えてくれました。「そこには、日本には日本の何かバリアがある。そこには霊的な覆いがある」というふうに書かれてましたけれど、私は「そ

れもそうかもしれないけれども、日本にいと周りと同じに合わせなきゃいけないとか、そういうことが強いのかな」っていうふうに思いました。そういう中で「アメリカの教会では、日本人が、英語がそんなに上手じゃない日本人が来ても、優しく受け入れてくれる。何かほかの人が当たり前と思っ
てしてるのが分からない、できなくても、寛容に受け入れてくれる。それに多くの日本人は、感謝し感動し心が開かれていく」っていうことが伝えられていました。そしてその寛容な心を示しているのは、普通のクリスチャン、教会の普通のクリスチャンの信徒の人たちが示すその寛容さによって、心が開かれているんだということが書いてありました。「日本の教会もそうであってほしい、教会外の人に対して、広い心、寛容な心を持ってほしい」という提言がそこにはあったんですね。「平和をつくる」。一つ目は、「優しくしなさい」。そうすれば相手の心に平和をつくることになるだろうということなんです。

二つ目は赦すということなんです。「赦し合いなさい」。先ほど読んだエペソの4章32節に「赦し合いなさい」とありました。私たちがお互いを赦すということができれば、自分と相手との間に平和をつくることになるでしょう。赦すということ、そして赦されること。赦し合うということなんです。

『たいせつなきみ』っていう絵本があるのをご存知でしょうか。この間、子どもたちの合同のCSキャンプがデイキャンプになって、さらにオンラインになったので、そこでちょっと読ませていただきましたけれども、その『たいせつなきみ』のストーリーブックっていう6冊の本と一緒にいる本があります。そこでパンチネロとルシアは仲直りしたんですね。いつのまにか競い合う関係、評価し合う関係、あるいは裁き合う関係になってしまっていた。友だち同士だったパンチネロとルシアは、ある時立つべき所に戻ります。エリの視点で、つまり自分たちを作ってくれた職人（彼らは木の人形なんですけれど）のエリの目線で、自分たちや周りの人たちを見るといって、立つべきところに戻った時に、彼らは仲直りをすることができました。

「仲直りする」。マタイの福音書5章25節では「和解しなさい」とあります。「和解」ということばは聖書に何度も出てきます。「あなたを訴える人とは、一緒に行く途中で早く和解しなさい。そうでないと、訴える人はあなたを裁判官に引き渡し、裁判官は下役に引き渡し、あなたは牢に投げ込まれることとなります。」とイエス様は言われました。「平和をつくる」。二つ目は赦すこと、赦し合いなさい、ということなんです。

Ⅲ 人と人の間に立つ

最後に三つ目、「間に立ちなさい」ということなんです。これは人と人の間に立つ、取り持つ。そうすることで、人と人との間に平和を作り出すことができるでしょう。自分ではなくてAさんとBさんが、誰かと誰かがうまくいなくなっている時に、間に立つということなんです。「仲介者、取り持つ人、調停する人になれ」ということなんです。

人の間に立つとか、仲介をするっていうことを考えたときに、誰が間に立つ人なのだろうか考えたときに、まず思い出すのは、イエス様のことなんです。キリストこそ仲介者です。前の聖書では、「仲保者」っていうときもありましたけれども、仲を取り持つ人です。キリストこそが唯一の仲介者です。

第一テモテ 2 章 5 節に「神は唯一です。神と人との間の仲介者も唯一であり、それは人としてのキリスト・イエスです」とあります。イエス様が神であると同時に人にもなってくださって、その神と人の両者の間の仲介者となって イエス・キリストが、神と人との間を取り持ってくださいます。和解させてくださる。今日交読文では、エペソの 2 章を読みましたが、神と人との和解のことが出てきます。そしてそれだけでなく、人と人も一つにされる、民と民も一つにされる、そのことがエペソ 2 章に教えられています。仲介者という言葉は、直訳すると「間に立つ人」「あいだに立つ」ということばですね。キリストこそ平和です。先ほど交読で読みました 2 章 14 節「実に、キリストこそ私たちの平和です。キリストは私たち二つのものを一つにし、ご自分の肉において、隔ての壁である敵意を打ち壊し」とあります。

ですから、私たちは誰かと誰かが仲違いしているとき、喧嘩しているとき、お祈りするかもしれません。「イエスさまが間に立ってください。神さまが間を取り持ってください」とお祈りするかもしれません。イエス様が唯一の仲介者なのです。それはそうです。神と人との間の仲介者は唯一ですね。ただ、じゃあ人と人との間はどうかだろうかって考えて、「とても自分にはできないのでお祈りだけします」ということもあるかもしれません。けれども、聖書の中にも、また私たちの人間の歩みの中にも、そのように人と人の間に立った人がいたということを教えられます。

その例のひとつ目としては、聖書の中の例ですね、皆さん、聖書の中で、人と人の間に立って仲を取り持った人っていうと、何か思い出すことあるでしょうか。もし何か思い出されたら、後で教えていただければと思います。

私が思い起こしたことは、使徒の働き 6 章でした。ヘブル語を話すユダヤ人と、ギリシャ語を話すユダヤ人がいました。血においては同じユダヤ人、私たちで言えば日本人の子孫です。日本人の子孫の中に、海外に移住した人たちがいます。そういう人は日系アメリカ人だったり、ハワイにもいますね、カリフォルニアにもいる。そして日系ブラジル人がたくさんいて、ペルーとか、ボリビアとかにも日系人がいる。おじいちゃん、おばあちゃん、ひいおじいちゃんたちは日本人だ。そういう意味で私たちと同じ人たちです。ただ外国に生まれて、住んでその国籍になっている。あるいはハーフになったり、血が混じりあったりしてることもあるかもしれません。今回のオリンピックでも、様々な国で生まれた日本人選手が活躍していたのを見ました。日本語を話す日本人と、英語しか話さない日系人、あるいはポルトガル語しか話さない日系人、というような違いでしょうね。ヘブル語を話すユダヤ人というのは、日本語を話す日本人と同じこと。ギリシャ語を話すユダヤ人というのは、今でいえば世界の共通語の英語だけを話す日本人ということと同じだと思います。

この二つのグループの間に立つために、執事たちが選ばれました。それまで使徒たちがしていたことを引き継いだのです。両方の立場を理解して、両方の味方になって、つなぐ役割です。全体を一つにまとめる、接着する役割。片方の立場に立たないで、片方の味方にならず、双方を理解して、両方の味方となるという難しい務めですが、そのためにこの人たちは選ばれました。

それから、人が、人と人との間に立つという実例として、もう一つ挙げたいと思うんですけど、モニカという人、アウグスティヌスの母親であった、モニカという人のことが、アウグスティヌスが紀元400年頃に書いた『告白』という本の中に書いてあるそうです。“書いてあるそうです”というのは、ちょっとその、家にあった『告白』の文庫本でその箇所を見つけようとしたんですけど、9巻21章と書いてあったその章を見つけることができなかつたので、直接読んではいない、という意味ですが、なので、新しい翻訳の文庫本で探したけど、見つからなかつたので、少し古いかもしれませんが、古い言葉かもしれませんが、読みたいと思います。

アウグスティヌスが自分の母親モニカのことを言っている、そして「汝（なんじ）」というのは神様のことを言っているわけです。「汝はかの汝のはしために」つまり母親のことですね、「なお次のような大きな賜物を与えたもうた。すなわち、互いに意思の疎通を欠いて、不和に陥るような人たちがあれば、彼女は、自分に出来る限り、その調停の役を引き受けた。彼女は相争う双方の者から、ふくれてむかつく怒りが吐き出す苦々しいことを、数々聞くのであったが…」少し飛ばして「いがみ合う二人を和解させるに役立つようなことでなければ、一方の言ったことを他方に告げないのであった」というような話が伝わっている。互いに不和不仲に陥ってしまう人たちがいる、互いに意思の疎通を欠いてしまう、そういう時「彼女はできる限り調停の役を引き受けた。双方の者から話を聞いた。苦々しいことも聞いた」ということです。そのように、「人と人との間に立つことができる。それは神さま、あなたが彼女に、私の母に与えてくださった賜物でした」とアウグスティヌスは言いました。ある意味では誰もができることではないかもしれませんが。簡単なことではないかもしれませんが。しかし、誰かがなすべきことでもあるのです。

聖書の中には平和についての言葉がたくさんあります。「あなたがたは平和を保ちなさい」。たとえばローマ12章18節。コリント人への手紙にも同じような言葉があります。「平和を保ちなさい」。「自分に関することについては、できる限り、すべての人と平和を保ちなさい」。キリストこそ平和です」。また「神との平和を持っています」という言葉があります。これはローマ5章1節ですが、新共同訳では「神との間に平和を得ています」とあります。聖書がまず私たちに語る「平和」というのは、第一に“神との平和”です。「神との間に平和を得ること、神さまご自身と仲直りをする事」です。それが私たちにとっての平和です。魂の平安です。そしてその次に、「人に優しくし、人と仲直りする」ということです。そうすると、誰かと誰かの仲直りをする手助けができるようになります。

私も神との間に、神さまと仲なおりをして、平和を保っていたいと思います。パンチネロが「毎日わたしに会いにおいで」ってエリに言われて、初めて会った日からエリに会いに行くことを改めて始めたのです。日々私も、神のもとに帰って、神の声を聞いて、一緒に過ごして、赦しと憐れみを確かめて、神との間に平和を持っていたいと思います。そして神さまとの間の平和はいただいている、得ていると思います。そして人とも仲直りしたいと思います。これにはできる場合と、すぐにはできない場合や、時間がかかる場合があるのかなというふうに思います。

振り返ってみると、喧嘩しちゃって、というふうまういかなくなって、それから仲直りしたっていうこともあったな一って思います。皆さんも色々あるかもしれませんが、私も思い出しました。

24歳か25歳の頃、50歳ぐらいの牧師先生と、あれは喧嘩してしまったと言ってよいだろうと思うんですけど、険悪になりました。すぐにではなくて、1年か2年か経った頃、仲直りすることができたのです。その時助けてくれた人がいたということも思い出します。二人で話すだけでは駄目だったかもしれません。3人で話して誤解が解けたという面があったと思います。誤解とか思い込みは、ダメージや怒りの思いが強くなると、二人ではうまくいかない時があるのです。そういう時に共にいてくれる人の助けというのは、とても大事だと思いました。

私もそうです。皆さんもそうですが、私も人と人、グループとグループの間に立ちたいと思います。世代と世代の違いがある、またこの教会でいえば今日は合同礼拝ですけど、実際に集まっていないので、中央にいる方、丘の上にいる方、庄和に今いる方、毎週の礼拝もそれぞれの三つの場所です。会堂と会堂の違いがあります。そして、それぞれが頑張っている働きのあちらの働きもあるし、こちらの働きもある。それぞれの立場があります。立っている場所が違います。視点、見ている目線が違います。違いがある時に、双方のことを、三つかもしれませんが、双方のことを理解し、一つにまとまるようにしたいと願います。でも時には「どうしてこちらの味方になってくれないのか」と、嘆かれたり、失望されたり、怒りを買ってしまったということもあるでしょう。私がもしできるならば、できる限り誰かと誰かの間に立って話を聞いたりしてですね、まとまれば良いなと思います。しかしそれらの働きをほかの人に委ねていく必要もあるでしょう。

さっき使徒の6章に触れましたけど、執事が立てられたのはそのためでした。教会内の少なくとも二つのグループの間に、立っている場所の違いがあったのです。そもそも言語が違う、話が通じないわけです。食べ物もたぶん違うでしょう。おそらく年齢層も違ったと思います。そして多分ですが、ヘブル語を話すグループと、ギリシャ語を話すグループは、職業が違ったり、収入が違ったんだろうと思います。そしてさらに文化の違い、コミュニケーションのタイプの違いなどなど、違いがありました。そこに不平が起こったり、不満が起こったり、あるいは苦情が出てきたということが、使徒の6章にあったのです。食卓のことというのは、今あげたようなことを含むとても大切なことです。その大切なことを、7人の執事に委ねて、「我々は祈りとみことばに専念する」と12人の人たちは言ったわけですね。

さて、また私自身が誰かと誰かの間に立てればと願ってますけれども、でも私が誰かとうまういかなくなる時もあるだろうと思いますね。その時どうしたらいいんでしょうか。皆さんだったらどうされるでしょう。なかなか難しいんですけど、「それじゃだめなんだ」と批判することも、裁くことも出来るでしょう。そのうまういっていない、どちらかを批判したり、もう一方をさばいたり、両方ダメなんだと思ったりすることも出来るだろうと思います。でもそうではなく、もしそういうことがある時には、その時は誰かに助けてほしい。「誰か助けてください」と私も言いたいと思います。

結び 平和を得て、平和をつくり出そう

平和を得ましょう。そして平和をつくり出しましょう。私たちはまず神との間に平和を得ましょう。そして人との間に平和を得ましょう。そのために互いに助け合いましょう。人と人との間に平和をつくり出しましょう。そしてそれがグループとグループになり、組織と組織、さらに国と国との間に平和をつくり出す者とならせていただく、そのような歩みに進ませていただきましょう。足元のことから、小さなことから、身近なことから始めましょう。

終わりに祈りをささげたいと思います。『平和を求める祈り』をですね、ご一緒に読んで祈りたいと思うのですが、皆で一斉に声を出すのを最小限にしたいと思いますので、私が読ませていただきますので、皆さん一緒にこの祈りを祈りましょう。本当はできれば『平和の祈り』の天田先生の賛美曲をですね、会衆で一緒に歌えればいいなと思ったんですけども、やっぱり長くて難しい曲であることもあるし、たくさん歌うことは控えなければならぬ状況もあるので、やめるということになりました。この祈りも、一緒に声は出しませんが、私が祈りとしてお読みしますので、心合わせていただければと思います。

では祈りましょう。

『平和を求める祈り』（ガイドブックの一番最後のページに載っています）

わたしをあなたの平和の道具としてお使いください

憎しみのあるところに愛を

いさかいのあるところにゆるしを

分裂のあるところに一致を 疑惑のあるところに信仰を

誤っているところに真理を 絶望のあるところに希望を

闇に光を 悲しみのあるところに喜びを

もたらすものとしてください

慰められるよりは慰めることを

理解されるよりは理解することを

愛されるよりは愛することを わたしが求めますように

わたしたちは与えるから受け ゆるすからゆるされ

自分を捨てて死に 永遠のいのちをいただくのですから アーメン